

おいぬま 国登録有形文化財生沼家住宅店舗及び主屋、土蔵

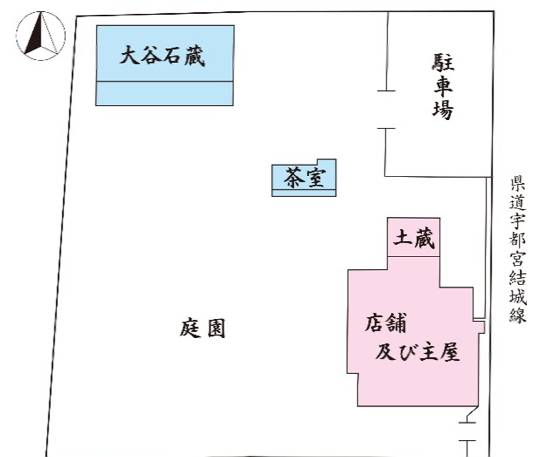


1 生沼家住宅について

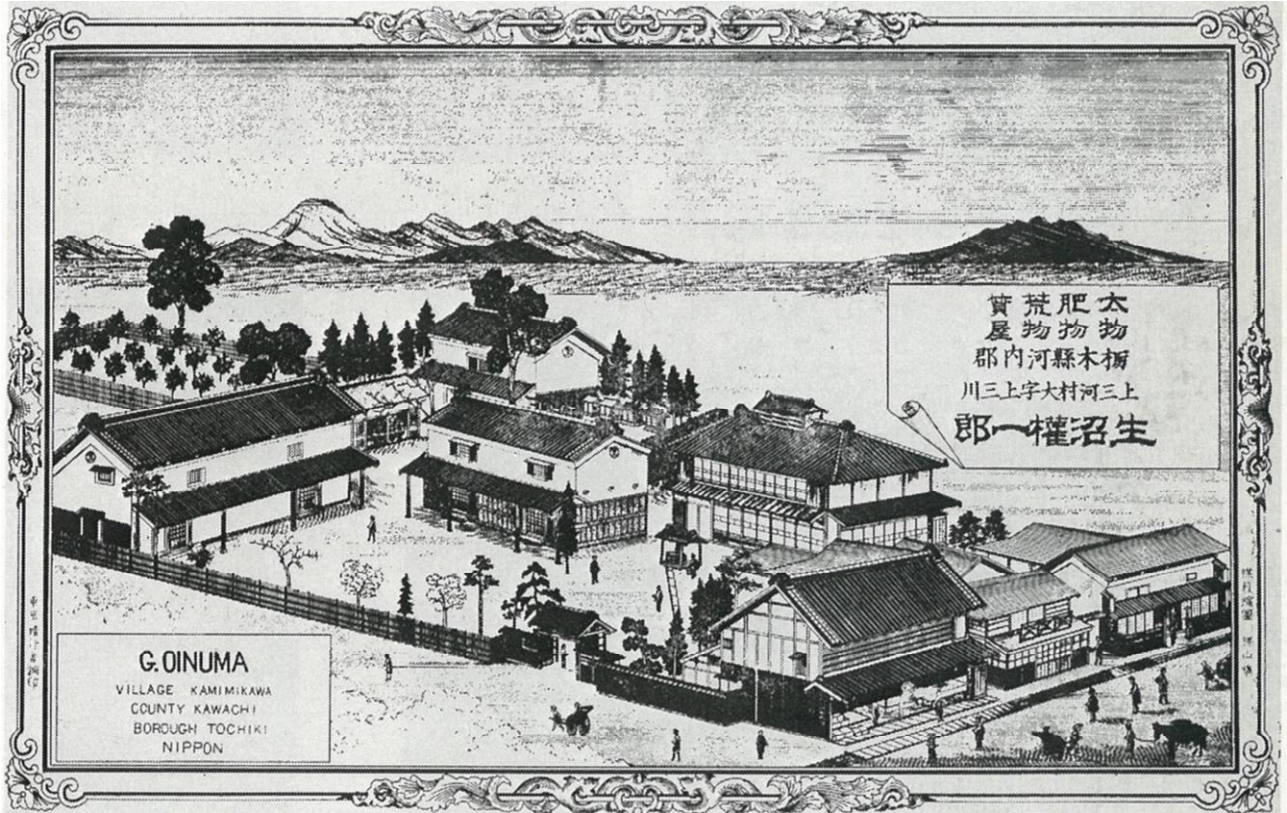
生沼家は、家系図によると初代は元禄11（1698）年生まれと記録されており、約300年の歴史を持つ上三川町の商家です。約3,000㎡の敷地内には、国登録有形文化財である店舗及び主屋・土蔵のほかに、昭和30年代に東京より移築された茶室、大谷石作りの石蔵があります。

その家系の何代目が商業活動を始めたのかは定かではありませんが、明治初年度に旧上三川村で地主総代となっていることから、江戸時代後期には、すでに地位を確立していたものと考えられます。また、生沼家に残された銅版画には、「太物・肥物・荒物・質屋」を営む生沼家の店構えが描かれています。東側の大通りに面した店舗のほか、いくつかの蔵が描かれており、現在の建物と比べると幾度かの増改築が行われていたことが伺えます。

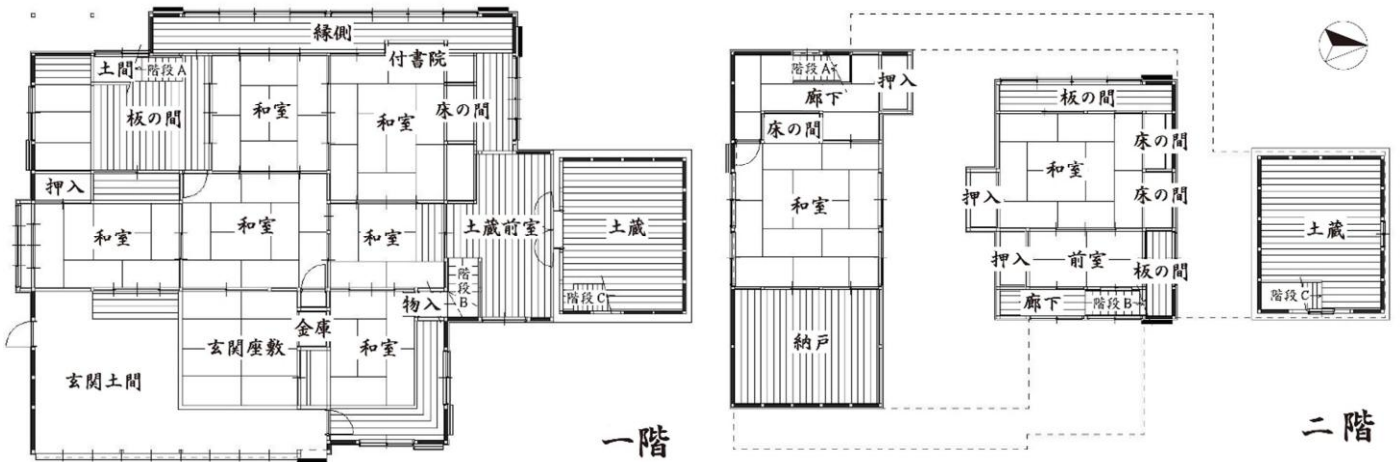
店舗及び主屋、土蔵の正確な建築年代は不明ですが、大正3（1914）年に主屋、同9（1920）年に土蔵が改築された記録が残されています。また、南側に隣接する道路は、石橋と真岡を結ぶ旧道であり、人々が行き交う様子も描かれています。肥料商・質屋業などで財を成す一方、早い段階での電話の設置や電力の導入などに尽力し、町の近代化に大きな影響を与えました。



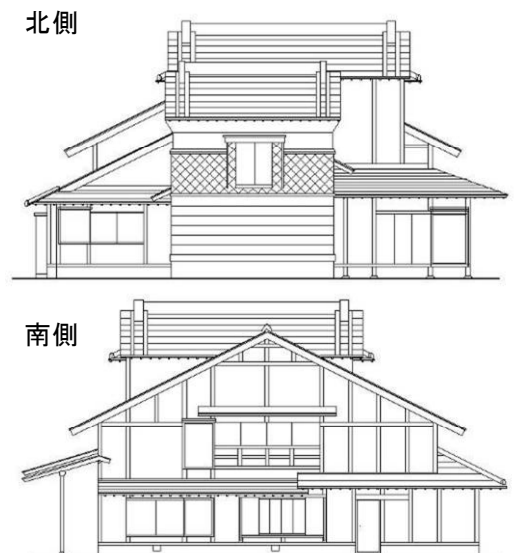
現在の生沼家の建物配置



生沼家に残る銅版画（東京・精行舎製）



店舗及び主屋、土蔵平面図



店舗及び主屋、土蔵立面図

(1) 国登録有形文化財（平成18年3月20日登録）

①店舗及び主屋

上三川町大字上三川字大町 大正3年築 木造2階建 瓦葺 建築面積187㎡

町中心部の角地に建つ商家です。桁行、梁間とも7間半とし、切妻造、平入の南北棟の北端に、東西棟の入母屋造の2階部を載せた特異な構造です。平側を出桁造とし、黒漆喰仕上げの南妻には大型の窓を開き、銅板葺の庇を付けます。角地の街路景観を形成し際立った存在です。

②土蔵

上三川町大字上三川字大町 大正9年築 土蔵造2階建 瓦葺 建築面積28㎡

店舗及び主屋の北側に隣接する文庫蔵です。桁行5.2m、梁間4.3mの切妻造、平入で、2階は街路側窓に掛子塗り戸を設けます。1階の外側は目地付モルタル塗洗出しとし、2階の鉢巻及び壁面は黒漆喰で仕上げ、腰を海鼠壁風とする外観を呈しています。

(2) 生沼家歴史年表

西暦	元号	できごと
1871	明治4	この年の上三川町図に二番組組頭兼伍長生沼権平の記載がある。
1877	明治10	宇都宮伝馬町白木屋にて第1大区1小区の地主惣代生沼権一郎らが参加し、県・郡田畑収穫量の示達と模範組合及び各村の収穫量を決定することを命じられる。
1879	明治12	第1回栃木県会議員選挙が行なわれ生沼権一郎が当選。
1897	明治30	河内郡郡会議員選挙が行なわれ、生沼権一郎、大地主議員となる。
1899	明治32	河内郡唯一の銀行として上三川銀行が開業する。（頭取：馬場宗司、取締役：生沼権一郎・松本四郎左衛門・黒須陶一郎）
		河内郡会議員選挙が行なわれ、生沼権一郎が当選。
		※生沼家においてこの頃から肥料販売が始まる。従来からの搾粕、米糠、豆粕のほか過リン酸などの化学肥料を販売。
1909	明治42	生沼権一郎が第4代上三川町長に就任。
1913	大正2	町内の生活困難の人々を助けることを目的に生沼共済会を設立。
1916	大正5	生沼権一郎の総所有土地面積120町歩を超える。
1924	大正13	生沼家所有の田48町9反、畑27町8反、関係小作人250戸。
1925	大正14	金融業及び土地の売買交換賃貸を目的とする生沼同族合名会社設立。執行社員は生沼権一郎。
1932	昭和7	生沼家、栃木県の貴族院多額納税者議員互選人の30番目。この年納付の直接国税1,438円。

2 今後の保存活用について

生沼家住宅は、令和元年度に所有者の方より寄付を受けた建物です。明治期から大正期にかけての上三川町の近代化を語るうえで欠かせない文化財であり、町では今後の保存活用の方針について検討しているところです。上三川町の中心市街地という立地からも、まちづくりの重要な拠点としての活用も期待されます。また、期間を限定した一般への公開等も随時行っています。



店舗及び主屋の縁側



縁側より庭園を臨む



1階の店舗



2階の客間



黒漆喰造りの大広間



土蔵の外壁